陸軍史の窓から（第23回）

陸軍衛生制度史（後段・上）

日露戦争後の陸軍と衛生部

荒木　肇

はじめに

今回は日露戦争後の社会の様子、ロシアのリターンマッチに対抗するための軍備拡張、陸軍の編制思想の変革と軍隊内務書の改訂、歩兵2年在営制などをお知らせします。もちろん、大ざっぱにしか語れませんが、第1次世界大戦（1914年）を目前にした陸軍の様子の一端を見ていただければと考えています。

■日露戦争直前の陸軍

開戦時陸軍の総兵力は、1903（明治36）年の陸軍常備団体配備表によれば、野戦師団数は近衛師団から第12師団までの13個です。この他に騎兵旅団、野戦砲兵旅団がそれぞれ2個、鉄道大隊1個がありました。

騎兵旅団は甲編制（4個中隊）の騎兵2個聯隊で編制され、野戦砲兵旅団は野砲編制の野戦砲兵聯隊3個で成っています。この後にも野戦砲兵旅団はもう一つ編成されました。特科隊聯・大隊番号は師団番号と同

じであるのはいまの陸自と変わりません。陸軍では本科を歩兵とし、以外の兵科を特科隊といいました。12師団（小倉）の第12野砲兵聯隊と同騎兵聯隊は通常通りです。ところが、第13師団（高田）は第19野砲兵聯隊と騎兵第17聯隊です。続いて野砲兵第20聯隊、騎兵第18聯隊は第14師団、第21野砲兵聯隊、騎兵第19聯隊は第15師団、野砲兵第22聯隊、騎兵第26聯隊が第16師団、第23野砲兵聯隊、騎兵第21聯隊は第17師団所属でした。最後の久留米の第18師団の固有野砲兵聯隊は第24、騎兵は第22聯隊となっています。それはこの野戦砲兵旅団や騎兵旅団の聯隊が創立順に番号を与えられたからです。

ほかには要塞砲兵が5個聯隊（東京湾・由良・呉・下関・佐世保）と4個大隊（芸予・函館、舞鶴、対馬）と警備歩兵大隊（対馬）が常備されていました。

また、内地外地派遣部隊として、2個台湾守備混成旅団、基隆（きいるん）要塞砲兵大隊、澎湖島（ほうことう）要塞砲兵大隊、清国駐屯軍（歩兵7個中隊）、韓国駐劄諸隊（歩兵1個大隊）があります。

台湾守備混成旅団の11個歩兵大隊は、近衛と第7を除いた各師団から1個大隊ずつ派遣されていました。つまり各師団の歩兵聯隊から1個中隊ずつが差し出されていたことになります。要塞砲兵を含む他兵科の部隊も内地の常設部隊から交替で派遣されていました。清国駐屯軍も常置の軍司令部の下に、兵力は内地からの交替派遣で開戦時には第7と第2師団から派遣されています。韓国駐劄隊司令部は、1903年11月に日露開戦に備えて設置されました。

■開戦直前の医師の数

1903年末の全国の医師の数はおよそ3万5000人です（以下はすべて概数）。うち大卒は1500人（4・3％）、専門学校卒5500人（16％）、開業試験合格者1万1000人（32％）、その他1万7000人（48％）となります。その他は府県内のみでしか開業や医療業務を許されなかった特許開業医でした。

おおよそ国民10万人あたり76人です。近頃は2022年では同じく275人ですから、いまと比べて医師はずいぶん少ない存在でした。また、薬剤師は2864人でしかなく、大学卒は120人（4・2％）、専門学校卒230人（8％）、外国学校卒業者は14人（0・5％）、開業試験合格者は2500人（87％）でした。このうち軍医や薬剤官になれたのは当初、大卒と専門卒だけでした。1896（明治29）年に開業試験合格者も採用するようになったのは、日清戦争で軍医数が足りなかった反省からです。

明治38年軍医

1898（明治31）年には、その年教育を終えた46名が軍医生徒採用の嚆矢だという記述が軍医学校史にあります。その前年には薬剤師免状をもつ現役志願者（つまり依託学生・生徒ではない）を選抜して19名を生徒としました。つまり、学生・生徒の時代から委託した正規ルートの人だけでは足りない、そこで免許を持つ有資格者からの志願者からも選抜するようにします。それがこの軍医、薬剤官生徒という制度でした。これがなくなり、また元のように依託学生・生徒制度のみの採用になったのは1908（明治41）年のことでした。

■日露戦争後の軍備拡張

陸軍やわが国が懸命に戦ったということは、戦時中でありながらも、なお4個師団の新設野戦師団を生んだことに現われています。1904（明治37）年の受験壮丁数40万8000名に対して徴集率が19・2％にも達したことにも国民は我慢しました。入営した若者の実数は7万8000名にもなります。また、戦時中の同年9月には徴兵令が改正され、後備役が従来の5年から10年に延長されました。

1906（明治39）年1月6日、平時兵力が改定されます。「（戦時中に臨時に編成された）野戦第13（高

日露戦役頃の衛生部員服装

田）乃至第16師団（京都）は平和克復後と雖も戦役の結果により新たに獲得したる国権を確保する為」に常置することになりました。

第14師団は宇都宮、第15師団は豊橋に司令部が置かれます。翌年には1910（明治43）年までに編成完結する第17（岡山）と第18（久留米）の2個師団が生まれ、19個師団体制ができます。

こうなると歩兵聯隊だけで日露戦争前より6個師団増えて24個聯隊、各聯隊には平時でも4人の軍医が隊付します。歩兵だけで96名になり、野砲兵聯隊にも24名、騎兵聯隊に各2名で12名、工兵、輜重兵大隊も各2名ですから24名、隊付医官だけでも136名が必要になりました。また、各師団司令部所在地には各診療科が揃った衛戍病院があり、そこにも医官は必要です。

1907（明治40）年から1910年までにさらに軍備拡充が行われました。第17（岡山）、第18（久留米）の2個師団を中心にした常設部隊の拡充です。

■明治40年の陸軍平時編制

1907（明治40）年10月9日、軍令陸乙第3号で「陸軍平時編制」が改訂されました。その全容の一部を紹介します。

第3条には「軍隊」について書かれています。19個の師団、台湾守備隊、重砲兵隊、交通兵旅団、警備隊、憲兵隊、懲治（ちょうじ）隊です。交通兵旅団というのは鉄道聯隊、電信大隊、気球隊を合わせたものでした。懲治隊というのは監獄と異なり、兵営生活を送らせながら改悛させるという教育部隊です。警備隊は対馬にありました。

第13条は官衙（かんが）の解説になります。陸軍省、技術審査部、築城部、軍馬補充部、兵器廠、砲兵工廠（2個）、火薬研究所、運輸部、会計監督部、衛生材料廠、被服廠、糧秣廠、これらにはすべて陸軍を冠称とします。千住製絨（せいじゅう）所、参謀本部、陸地測量部、教育総監部、東京衛戍総督部、要塞司令部（11個）、衛戍病院（77個）、聯隊区司令部（72個）、沖縄警備隊司令部、衛戍監獄（19個）、東京廃兵院、台湾総督府陸軍部、台湾衛戍病院（4個）です。

第14条が学校になります。すべて陸軍を冠称とします。大学校、砲工学校、戸山学校、騎兵実施学校、野戦砲兵射撃学校、重砲兵射撃学校、士官学校、中央幼年学校、地方幼年学校（5個、地名を冠す）、砲兵工科学校、経理学校、軍医学校、獣医学校などになります。

そうして一般の方にもっとも誤解を受けるのが特務機関です。これが第15条に書かれています。元帥府、軍事参議院、陸軍侍従武官、前同東宮（とうぐう）武官、皇族附陸軍武官、陸軍将校生徒常置委員、外国駐在員（大公使官附武官・同補佐官）、陸軍主計候補生、同衛生部士官候補生、同衛生部士官学生、同候補者、統監附陸軍武官、元帥副官、軍事参議院副官、台湾総督府副官、関東都督府副官になります。

皇族に関する規定では、男性の皇族はすべて陸海軍いずれかの軍人になりました。その皇族には必ずお付き武官がいたのです。また、侍従武官には陸海軍それぞれがありました。衛生部士官学生というのは、いまの陸自BOCやAOCにあたる軍医の課程の受講者、上長官（佐官）軍医の入校もあったからです。

特務機関というと諜報や謀略に活躍した組織を思う人がいるようですが、軍隊、官衙、学校以外にあるものが特務機関でした。

さらに第16条には樺太、韓国及び南満洲に駐屯する部隊があります。樺太守備隊司令部、樺太衛戍病院、韓国駐劄軍司令部、鎮海湾、永興湾要塞司令部、鎮海湾重砲兵大隊、韓国駐劄憲兵隊、軍楽隊、兵器支廠、軍馬補充部支部、衛戍病院（4個）、陸軍倉庫、衛戍監獄、関東都督府陸軍部、旅順要塞司令部、旅順重砲兵大隊、関東憲兵隊、関東軍楽隊、関東兵器支廠、関東軍馬補充部支部、関東衛戍病院（3個）、関東陸軍倉庫、関東衛戍監獄、関東運輸部支部。

これに北支那駐屯部隊、北京・天津周辺に駐屯する部隊が加わり、当時の陸軍の全勢力になります。

■戊申（ぼしん）詔書とその時代

1908（明治41）年、戊申（つちのえさる）の年に出された詔書があります。1889（明治22）年10月30日に発布（公布は翌日）された「教育に関する勅語」ばかりが今では有名ですが、この明治41年10月13日に渙発された「戊申詔書」は戦前社会では教科書にも掲載されていました。

日露戦争後の個人主義・社会主義思想の浸透に対処して、国民精神を

作興するために出されたのです。わが国が日露戦争の勝利の結果、極東で重要な地位を占めることになったことを述べ、更に国運の発展を図るためには「上下（しょうか）心ヲ一ニシ、忠実業ニ服シ、勤倹産ヲ治メ」、「醇厚（じゅんこう）俗ヲ成シ、華ヲ去リ実ニ就キ、荒怠相誡（いまし）メ自疆（じきょう）息（やす）マサルヘシ」と勤倹を奨め、国民道徳の方向を指示します。この詔書の渙発の翌日、桂太郎首相、平田東助内相は地方長官会議で社会主義思想の取り締まりと、道徳と経済の一致による戦後問題処理を訓示しました。

詔書が示している社会の様子を見ると、階層の差が益々目立つようになり、国民は分断され、対立し、真面目に仕事に向かわず、生活ぶりは派手になり、昔のような純朴な人柄は少なくなり…というところでしょうか。時代は無規範（アノミー）になったと指摘する研究者もいます。それは陸軍部隊にも現われました。

■軍紀弛緩

この年1月には第16師団の古参兵10数名が集団で兵営から脱走し、翌朝、歓楽街で取り押さえられました。中隊の指導掛曹長から注意を受けて反抗的態度をとり殴打を受けて、その腹いせだったといいます。また、3月には第1師団の歩兵第1聯隊の兵士30数名が集団で脱営しました。日露戦争で奮闘した経験をもつ中隊長から厳しい射撃の訓練を課されて、それに不満をもち、大隊長に直訴しようとしたものです。その直後には、やはり第16師団の大阪歩兵聯隊で10数名が夜間に歩哨の制止も聞かずに門を越えて脱営します。これも酒保で酔い、騒動を起こし、下士官から注意されたことがきっかけでした。他にも北海道では砲兵たちが脱営して料理屋で騒ぎ、鎮圧にかけつけた将校にも暴言を吐くといった軍紀弛緩としかいいようのない事件です。

少し時計の針を戻すと、1906（明治39）年は社会主義運動と争議の年でした。1月には日本平民党と日本社会党が結党届を出し、2月には両党が合党、日本社会党第1回大会が開かれます。翌3月には社会党としての初めての直接行動となった東京市内電鉄3社の電車賃値上げ反対市民大会を開き、デモ隊が電車を襲いました。同盟罷業（ストライキ）も2月には石川島造船所、5月阪神電鉄、8月は小石川砲兵工廠、呉海軍工廠、12月大阪砲兵工廠と続きます。

日露戦争後の不況と戦後インフレが重なり、国民は、とりわけこの20年間で急激に増えた都市大衆は、日露戦争後の目的喪失感にさいなまれていたといえます。

■陸軍の編制思想の変化

ロシア軍との戦いの結果、わが陸軍の短所と欠点をしっかり見抜いたのは、満洲軍参謀だった田中義一歩兵中佐（1864～1929年）でした。田中は山口県萩の下級卒族の生まれ、役場の吏員などで苦労をし、1883（明治16）年に教導団砲兵科に入ります。その10カ月後には陸士に入校し、歩兵少尉になり、陸大を出てロシアに留学、ロシア歩兵聯隊での隊附も経験しました。戦時中には満洲軍司令部で勤務、復員して参謀本部に戻り、続いて歩兵第3聯隊長になります。同時進行していたのが彼を中心にした委員会による「内務書」の改革です。

戦後の陸軍では、これまでの考え方を崩してしまった日露戦争中の野戦師団と後備旅団の戦闘力の格差が大きな問題になっていました。現役兵と予備役兵で構成した野戦師団の歩兵旅団は2個聯隊（3個大隊＝12個中隊×2）でした。対して後備歩兵旅団は少数の現役兵と予備役兵を基幹として編成された3個聯隊でした。ただし、後備聯隊は2個大隊で8個中隊、それが3個で後備歩兵旅団となりました（合計24個中隊）。現役聯隊の軍旗の総（ふさ）は紫、後備聯隊のそれは緋色（ひいろ）でした。

田中義一は伝記の中で次のように述べています。「戦争前にあっては、在郷軍人は現役部隊に動員せられ、現役兵の一部分を補って野戦軍を編成したので、現役兵が主で、在郷軍人は従であった。然るに戦争後は其れが反対になって、在郷軍人が主力で、現役兵は其の一部を補って、野戦軍を編成することになった」。編制思想上の変化が生まれたのです。

田中義一首相時代

■兵員の大増徴

歩兵のみに限っても、戦前の常設部隊156大隊は、1907年度には228大隊とおよそ1・45倍にも増えました。1912（明治45）年度の現役兵は10万3784人となっています。うち歩兵は6万9000人、その補充兵は7万3000人ほどです。3か月の教育で帰宅できる輜重輸卒が1万5000人、その補充兵は6万3000人となっています。

1907（明治40）年10月に陸軍が行った「陸軍現役歩兵科兵卒ニシテ勤務ヲ習得シタル者ハ当分ノ内服役二年ノ終ニ於テ之ヲ帰休セシムルコトトシ」という施策がありました。軍の主兵たる歩兵の事実上の現役2年制が始まります。この改正は、同時に多面的な問題をもたらしました。

第一は同一年齢の壮丁中からの徴集率が、ひどく高くなったことです。平時編制の歩兵1個大隊の兵員数を600人と仮定すると、3年制では毎年200人ずつを入営させればいいのですが、2年制になると300人を集めねばなりません。1903（明治36）年の常備団体中で歩兵は157大隊（他に屯田歩兵2大隊）、そこで毎年の徴集数は3万1400人となります。

しかし、2年制となった明治40年は歩兵241大隊（独立守備隊6を含む）ですから、毎年の徴集者は7万2300人となりました。およそ2・3倍にも現役兵が増えました。この頃から明治末まで、毎年の壮丁数は40万以上45万人以下で、甲種合格率は40％以下36％以上です。16万人内外の甲種から歩兵7万、騎兵4000、砲兵8000、工兵4500、輜重兵2000、輜重輸卒1万5000というほぼ10万4000人あまりの現役兵を採りました。

第二の問題は、こうして多くの予備役兵員を手に入れたものの、従来、3年で一人前に育ててきた教育を2年で行わねばなりません。しかも、戦場の勇者は戦勝の基礎となるものです。そこで軍隊の教育は「良兵」を造るだけではなく、「良民」を造るための性格陶冶の場にならねばならないと考えられました。

陸軍省歩兵課編の『帝国陸軍』（大正2年）から引用します。「良卒は良民たらざるべからず。淳朴にして勤勉、国民の中堅、儀表として郷党州閭（きょうとうしゅうりょ）の間に尊敬せらるる人にして、始めて戦場の勇者たり得べし。これを今日の軍隊教育の根本主義となす」

こうして陸軍は、ただ若者を鍛錬して兵員にするだけではなく、中隊は家族であり、教育の場であるということを前面に押し出していきます。また、下士官を庇護し、権威を与えようとする施策も行われます。

今回は、あまり衛生部の内容に触れることができませんでしたが、次回以降の前提となる話題ばかりです。次回は世界大戦と学制改革などについて聞いていただきましょう。

楓之典君乳母草子外伝

続猫様詣（まうで）―豪徳寺1

中條　恵子　陸自85

都人もすなる寺社参りを再び乳母もせむとてかちより詣けり

秋のお彼岸の頃、猫様と楓之典君の父上に導かれ、招き猫縁起でこちらも名高い豪徳寺を参拝して参りました。